

編集後記

一、第七輯をお送りします。発刊時機が非常に遅延し、御迷惑をかけました。謹んでお詫び申し上げます。

一、本輯には、副島廣之氏稿外二編を収録しました。

一、本稿は、昨年三月、世界連邦日本宗教委員会の事務局から神仏基督教二十八人の参拝団長として、シナイ山共同礼拝に参加した記事の一部の再録である（中外日報紙・59・6・1）。

一、礼拝の様子は本文によつて承知して頂きたい。各宗教の代表者が、合同して世界平和実現を祈願することは賛成する。

神道人としては些かの疑義もいだが、ためらはずに参加が可能である。処で日本からの参加者の名簿をみると、旧教はみえるが新教の名はない。欠落は不参加であつたためか。とすると何故か！との疑念が生まれる。

筆者は毎歳元旦には明治神宮に参拝する。毎年ではないが、この数年間、神宮橋或は代々木の附近で、「真のカミはここに在り」といつた幟を垂らしてキリスト教の宣教をしてゐる一団に遭つて、不快な想になつたことが屢である。

従来キリスト教は、それであり、それで我道を歩むことが出来た。現在ではどうか。異国での伝道はさておき、我国での伝道の根本方針は、サビエル以来の他教への批判は鼻持ちにならぬ程に高慢不遜であつた。西欧の16・17世紀の民度、国民一般の教養程度は、我国民のそれに比すると低い。従つて西欧人が我国を目して野蛮人視するのは無知であるか或は想ひ上りかの何れかにすぎぬ。

一、サビエルらの宣教師が、我国人に接して正直さ、礼讓さ、思考の論理さ、教養の豊かさに驚歎し、日本には一流の布教者を派遣する要あり、と報告してゐることは当然のことである。にも不拘、彼らは、或は大部分の牧師らは今日も猶依然として基本方針を頑冥に固執してゐるやう思はれる。

一、マ元帥の占領に当り、多額な費用を投じ意図したこと、日本人をキリスト教者に回心せしめることにあつた点は、諸報告で明らか点である。

一、仮にキリスト教のGODが唯一の絶対者であるとしても、新旧聖書の文字に一言一句謬りのない真理、GODの神意が、そのままに正確に書きしるされてゐると云へるのだらうか。又聖書を核として説き明かす神学は、神意の全真意をいささかも傷ふことなく、誤解することもなく文字化し得た体系書であると、彼らは確認してゐるのだらうか。

彼らのドグマによると、GODは絶対者である。人間は絶対者が土塊から創つた被造物にすぎぬ上に、アダム・イヴの原罪を生れながらに背負つてゐる宿命の罪人である。この人間は、GODとは全く対比することの出来ないもの、とみるのが彼らの正統といはれるドグマの説くところである。そこで人はGODと共に、一つの世界には生きてままで生活のかなはぬことは申すまでもなく、直接の交りは望めないとの神学が成立する。そこでイエスという、一面GODの子、一面人間の子たる二面性の神人を、仲介者として設定し、教義に筋を通してゐる。

としても、絶対者の啓示は絶対であらう。この完全な欠て啓示を受ける側の者は、一般人はもとより、聖人であらうと優れ

た神父・牧師であらうと、何れにしても人間である限り、不完全者であり罪人であるから、啓示を啓示のまま完全無欠に言語・文字化することは出来ない、と理論上理解せられまいか。

一、更に一步譲り、絶対至上の啓示が、そのまま無謬のままに文字化せられてゐるものと仮定しても、この完全な啓示内容を読む人、信者なりは罪人で不完全者であるから、GODの真意をそのままに理解することは到底できない。

即ち、説教する聖職者自体が罪人であり不完全者であるから、聖書は完璧であるとしても説かれる内容には誤解はありうるし、誤積もおこらう。この点を反省し且つ聖書を説く聖職者は、この事情を正しく諒解するなら、己の説く聖書の無謬性などは、一言半句なりとも昂然と強調し得ぬ筈ではあるまいか。極めて謙虚におずおずとして説くことこそ説教者に第一に要求される心構へではあるまいか。

比喩で申すと、無限の大海の水を用器で汲みとるやうなものだ。用器は如何程大きくとも有限にすぎぬ。無限に立向ふに有限をもつてしては不可能である。人としての牧師は果して、GODの真意を正しく信者に伝へうると確信してゐるのだらうか。

一、聖職者の説教には、条件付きでのそれであることを、聖職者自身が謙虚に納得することが第一に必要なならう。

一、宗教者が、世界平和を祈ることは結構であるが、なすべき責務の第一要件は先づ当該宗教者が謙虚たるべきことではなからうか。他宗教の門前で、「真のカミは茲にあり」などと怒鳴る類は、魚商の店先きで、他の魚売りが、俺の魚は新鮮だ、新鮮だ、と客よびしてゐるのと同様である。「己の魚は漁りた

てだよ、新しいよ!」と叫ぶ声の裏には、「茲の店の魚は古いよ!」との語が控へてゐることに気付かぬ愚者の痴れ言にすぎない点に考慮の届かぬ大馬鹿者はをるまい。

一、明治神道の研究は、筆者の学生時代では、史学の対象になつてゐなかつた。従つて研究者として少なかつた。戦後は事情が一変した。一部の人は神道断罪史観に立つて、その淵源として明治神道史を扱つてをる。果してかやうな史観は客観的にみて納得出来るか。

一、阪本氏の稿は、直接この問題に取組んではをらない。一つの敷石としての稿である。親子二代に亘る明治神道の研究者としての業績を見守りたい。

一、加藤玄智先生は、神道学者としての一面漢詩人でもあつたことは周知の通りである。漢文の学習は戦後の低能化政策を真正面にうけた被害者の一つ。占領軍の弾圧は、第一に物理的生理的日本人の温存であつた。腹の底は、日本文化の抹殺、精神的日本人即日本民族の解体、弱体化にあつた。漢字・用語の制約は、古典への接触を困難とし、古典からの分断は、過去と現在との一貫性の否定を結果する。

一、国語力の低下、弱体化は日本人を精神上根なし草化にする唯一の策である。

戦後、教育をうけた人も、既に中堅として将来の祖国の運命を負う第一線の働き手となつた。漢文に親しみの薄い中堅士に、先生の思想の一端にも触れていただきたい念願で、本稿を神谷俊司氏に依頼した。

一、神職として奉仕した体験者であり、文筆家であり哲理的

に世界状勢の理解、見透す見識ある評論活動をつづける氏は適任者とみてお願ひした。じつくり味読して頂きたい。

一、本稿掲載原稿として小野祖教氏の一篇がある。加筆訂正のため目下、執筆者の手許に返却されてゐる。次号はこれを中心にして早速にでも発刊したい。

—安津素彦—

神道研究紀要（第七輯）

昭和六十年五月三十一日発行

会費年一、〇〇〇円

編集兼
発行者

加藤玄智博士記念学会
代表者 高澤 信一郎

郵便番号 一五一
電話番号 東京三七九一五五一
振替口座 東京九一四二五九三番
印刷所 明德印刷出版社